下顎骨中心性に発生した扁平上皮癌の2症例

中嶋正博・森田章介・有家 巧・松下 貢
松本晃一・水野直之・岡野博郎・松本喜雄*

Two cases of intraosseous squamous cell carcinoma of the mandible

Masahiro NAKAJIMA・Shosuke MORITA・Takumi ARIKA・Mitugu MATSUTA
Koichi MATUMOTO・Naoyuki MIZUNO・Hakuro OKANO・Yosio MATUMOTO*

Abstract: Intraosseous carcinoma is known to be a very rare lesion. We present 2 cases of squamous cell carcinoma which occurred in the mandible. Case 1. 52-year-old male. This case was considered that the tumor arose from residual cyst of 167 region. We performed segmental resection of the mandible and now the patient was uneventful 5 years and 4 months after operation.

Case 2: 47-year-old female. The origin of this case was obscure, but we diagnosed this tumor as a intraosseous carcinoma, because the oral mucosa was intact and no other lesion which causes metastasis was detected. We performed neck dissection and segmental resection of mandible. Metastatic lesions were found in the skull, ileum and lumbar vertebrae and the patient died 3 months after operation.

Key words: squamous cell carcinoma (扁平上皮癌), intraosseous (中心性), mandible(下顎骨)

緒 言

下顎骨中心性に癌が発生することはまれでその由来組織としては迷入した上皮, 歯源性上皮および嚢胞上皮などが考えられている。今回われわれは下顎骨中心性に発生した扁平上皮癌の2症例を経験したので報告する。

症例1

患者: 52歳 男性。

初診日: 昭和58年1月

主 訴: 167部疼痛。

既往歴: 昭和57年肺炎に罹患。

現病歴: 昭和57年10月頃 167部に疼痛が生じたため、某歯科にて 145の根管治療を受けたが、症状が改善せず、紹介され来院した。

現 症: 全身状態は良好であった。顔貌には異常はなく、所属リンパ節の腫脹および圧痛も認められなかった。口腔内では 167は欠損し、同部の 頬側歯肉および歯肉頬移行部にびまん性の腫脹、軽度の圧痛および羊皮紙様感が認められた。また 16頬側歯肉部に瘻孔が認められた(写真1)。

X線所見: オルソパントモグラムにて 1567部に歯槽から下顎下縁の骨皮質に及ぶ単胞性のX線透過像が認められた。境界は比較的明瞭であったが、15根尖部では一部境界が不明瞭な部分が認められた(写真2)。側面斜位X線写真では 15根尖部に多胞性を思わせるX線透過像が認められた(写真3)。また咬合法X線写真では頬舌側の皮質骨は菲薄となり、わずかに膨隆が認められた(写真4)。

臨床診断: 残遺嚢胞あるいは歯源性腫瘍の疑い。

処置および経過: 昭和58年1月 生検を行ったところ扁平上皮癌と診断されたため、同年2月 に左側顎下部郭清術および 13～下顎枝前縁部に至る下顎骨区域切除術を施行した。また AO プレートを用いて下顎骨

大阪歯科大学口腔外科学教室第2講座

(主任: 岡野博郎教授)

* 大阪赤十字病院歯科

(主任: 松本喜雄部長)

The Second Department of Oral and Maxillo-facial Surgery Osaka Dental University (Chief: Prof. Hakuro Okano)

* Department of Dentistry Osaka Red Cross Hospital (Chief: Dr. Yosio Matsumoto)

受付日: 昭和63年11月25日

写真 1 症例 1 : 初診時の口腔内写真

写真 4 症例 1 : 初診時の咬合法X線写真

写真 2 症例 1 : 初診時のオルソパントモグラム

写真 5 症例 1 : 摘出物を近遠心的に割断し舌側より観察, 1567部に単一の腔を認める.

写真 3 症例 1 : 側面斜位X線写真

の再建を行ったが、術後感染のため昭和60年9月プレートの除去を行った。現在術後5年4か月経過したが、再発は認められない。

摘出物の肉眼的所見：近遠心的割面では、1567部に5×4cmの単一腔が認められた(写真5)。

病理組織学的所見：近遠心的全割標本において167部に嚢胞腔がみられ、15根尖下方において顎骨内に浸潤する腫瘍が認められた(写真6)。腫瘍細胞は異型性を有し、角化傾向がみられ、胞巣状に増殖していた(写真7)。また腫瘍に隣接して重層扁平上皮からなる嚢胞壁が認められた(写真8)。

症例2：47歳 女性。

初診日：昭和61年9月

主 訴：左側下顎角部の腫脹および下唇部の麻痺感。

既往歴：特記すべき事項なし。

現病歴：昭和61年8月頃より左側下顎角部の腫脹および下唇部の麻痺感を自覚、某歯科にて16を抜歯され、その後内科にて抗生物質を投与されたが前記症状が改善せず、当科を受診した。

現 症：全身状態は良好で、左側下顎角部にびまん性の腫脹および圧痛が認められ、左側下唇に知覚鈍麻がみられた。口腔粘膜は正常色を示し、18遠心頬側部に軽度のびまん性の腫脹および圧痛がみられ、11-6にはわずかに打診痛が認められた。

X線所見：オルソパントモグラムでは左側下顎大白歯

写真 6 症例 1：近遠心的全割組織標本
15 根尖下方で顎骨内に、浸潤する腫瘍
が認められる（矢印）。

写真 7 症例 1：腫瘍細胞が胞巣状に増殖している。

写真 8 症例 1：嚢胞上皮は重層扁平上皮からな
っている。

写真 9 症例 2：初診時のオルソパントモグラム

写真 10 症例 2：初診時の咬合法 X 線写真
18 遠心頬側部に不透過像を認める（矢印）。

部にわずかに骨硬化像が認められた（写真 9）。また咬合法 X 線写真では 18 遠心部の頬側骨皮質外側に骨膜反応を思わせる不透過像がみられた（写真 10）。

臨床診断：下顎骨骨髓炎の疑い。

処置および経過：下顎骨骨髓炎を疑い、抗生物質を投与したところ一時症状が軽快したが、約 3 週後に左側下顎角部の腫脹および下唇の麻痺感が増悪した。咬合法 X 線写真にて頬側骨皮質外側の不透過像が増大し（写真 11）、またゼロラジオグラムにて左側下顎枝の外側部に旭日像を認めたため（写真 12）、悪性腫瘍を疑い生検を行ったところ扁平上皮癌と診断された。昭和 61 年 11 月 6 日に左側頸部郭清術および 13～下顎枝部に至る区域切除術を施行した。術後 3 か月のシンテグラムで頭蓋骨、腰椎および腸骨に転移が認められ、昭和 62 年 2 月癌性悪液質にて死亡した。

病理組織学的所見：異型性を有し、多数の分裂像のみられる腫瘍細胞が骨髓および皮質骨内に密に増殖し、癌真珠も散見された。また骨膜下には下顎骨の全周にわたり新生骨が形成され、その間隙にも腫瘍細胞が浸潤し、胞巣状に増殖していた（写真 13, 14）。

写真 11 症例 2 : 初診後約 3 週の咬合法 X 線写真
[8 遠心頰側部の不透過像が増している (矢印)].

写真 12 写真 11 と同時期のゼロラジオグラム
左側下顎骨外側部に旭日像が認められる.

考 察

顎骨中心性に癌が発生することがあり、その由来組織としては石川¹⁾は歯原性上皮、胎生期の突起融合部に残存した上皮あるいは顎骨内に迷入した線組織などが考えられると述べている。一方 WHO²⁾の分類では顎骨内に発生する歯原性の癌腫を 1) 悪性エナメル上皮腫、2) 歯原性上皮の残遺より発生する扁平上皮癌 (Primary intraosseous carcinoma), 3) 歯原性嚢胞より発生するものの 3 型に分けている。しかしその発現頻度はきわめて少なく、本邦においても 10 数例が報告されているのみで³⁻¹⁴⁾、そのほとんどが下顎に発生している。また上野ら¹⁵⁾は下顎癌 122 例のうち中心性癌は 9 例であったと報告している。顎骨中心性癌のなかでは嚢胞より発生したものが最も多いといわれ、Eversole¹⁶⁾らは 36 例中 27 例 (77%) が嚢胞に関係し、上顎より下顎に多くみられた (上顎: 6 例, 下顎 30 例) と述べている。Sear¹⁷⁾もまた嚢胞より発生したものが多く、他の中心性癌は少ないと

写真 13 症例 2 : 摘出物全割組織標本
(M: 骨髄, C: 皮質骨, 矢印: 骨膜)

写真 14 写真 13 の強拡大
新生骨の間に腫瘍細胞が密に増殖している。

述べている。顎骨中心性癌と診断するためには、粘膜癌が顎骨に浸潤したものではないこと、および転移性の腫瘍でないことが証明されなければならない。また嚢胞壁から癌が発生したと認めるためには、正常の嚢胞上皮と癌との移行が認められることが重要な所見であるといわれている⁵⁾。第 1 症例ではあきらかな嚢胞上皮と癌との移行は認められなかったが、肉眼的にも組織学的にも単一の嚢胞腔が認められ、嚢胞壁に正常の重層扁平上皮からなる部分と癌化した部分がみられ、それらが互いに近接していたことより、嚢胞より発生した扁平上皮癌と診断した。第 2 症例では口腔粘膜に異常が認められないこと、他部位に原発巣を思わせる所見がなかったことより中心性癌と判断したが、組織由来を証明することは困難

であった。

臨床症状については多くは腫脹、疼痛であり^{13,14)}、その他に歯の動揺、麻痺なども時に認められているが、われわれの第2症例において下唇の麻痺を認め、顎骨中心性病変を疑わせる重要な所見の一つであると思われる。X線像においては円形あるいは類円型のX線透過像として現れることが多いといわれているが、境界が明瞭であるものあるいは不明瞭であるものなど種々の報告があり、一定でない。このように臨床所見、X線所見とも多様で、実際に臨床診断において嚢胞性疾患、歯源性腫瘍あるいは下顎骨骨髓炎などが疑われることが多く、確定診断を困難にしている。なお第2症例において、骨膜下に放射状に新生骨が認められたが、Aisenberg¹⁸⁾、Camplenas¹⁹⁾、戸塚⁴⁾も同様の骨新生が認められたと述べている。一般に癌の浸潤に対して、反応性あるいは修復のための骨新生がみられる²⁰⁾ことが知られており、本症例においても顎骨内での癌の増殖に対して、反応性に骨膜性の骨新生が起こったと考えられるが、その間隙にも腫瘍の浸潤が認められたことは本腫瘍の進展の速いことをうかがわせる。

治療に関しては化学療法や放射線療法を併用したものもみられるが、手術を中心とした治療が多く行われている。しかし下歯槽神経血管束にそって、腫瘍の浸潤がみられた報告⁷⁾があり、切除範囲に関しては十分な検討が必要であると思われる。

ま と め

今回われわれは、52歳男性および47歳女性の、下顎骨中心性に発生した扁平上皮癌の2症例を経験したので報告した。1例は67部残遺嚢胞より発生したものであったが、もう1例においてはその組織由来を確定することは困難であった。

本論文の要旨は昭和63年1月22日第6回口腔腫瘍研究会(千葉)において発表した。

引 用 文 献

- 1) 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ。改定版，永末書店，京都，1982，p 630.
- 2) Pindborg, J.J. and Kramer, I.R.H.: Histological typing of odontogenic tumors, jaw cysts and allied lesion. International histological classification of tumors, NO 5, WHO, GENEVA, 1971, p 35-36.
- 3) 石川雅夫，豊田裕介，他：下顎骨中心性癌の1症例。日口外誌 25: 158-162 1979.
- 4) 戸塚靖則，富田喜内，他：12歳，男子の下顎に生じた顎骨中心性扁平上皮癌の1症例。日口外誌 25: 1487-1494 1979.
- 5) 木下鞆彦，永田可清，他：下顎骨嚢胞に生じた扁平上皮癌の1例。日口外誌 26: 180-185 1980.
- 6) 武田 進，木村茂男，他：下顎骨中心性扁平上皮癌の2例。口科誌 30: 111-120 1981.
- 7) 長縄吉幸，日下雅裕，他：下顎神経に沿って浸潤した下顎中心性癌の1例。日口外誌 27: 62-65 1981.
- 8) 仁木 寛，山崎一郎，他：ろ胞性歯嚢胞にみられた扁平上皮癌の1例。日口外誌 29: 100-102 1983.
- 9) 松田雅栄，普天間朝義，他：顎骨中心性に発生した Pseudosarcomatous carcinoma の1症例。日口外誌 29: 145-151 1983.
- 10) 西脇幸博，真館修一郎，他：下顎骨中心性扁平上皮癌の1症例。日口外誌 29: 196-200 1983.
- 11) 傾家利男，尾崎登喜男，他：下顎骨中心性癌の1例ならびに文献の考察。日口外誌 29: 77-82 1983.
- 12) 斎藤 弘，田川俊朗，他：下顎骨中心性癌の3症例。日口外誌 30: 32-39 1984.
- 13) 中井通明，相楽貞文，他：長期間X線像により観察された下顎骨中心性扁平上皮癌の1例。日口外誌 30: 97-103 1984.
- 14) 高木 慎，長島駿一郎，他：顎骨中心性癌の2例。日口外誌 33: 107-114 1987.
- 15) 上野 正，岡 達，他：口腔癌の療法と予後に関する研究(第3報)下顎癌122例について。口病誌 28: 432-444 1961.
- 16) Eversole, L.R., Sabes, N.R., et al.: Aggressive growth and neoplastic potential of odontogenic cysts. Cancer 35: 270-282 1975.
- 17) Sear, M.: Primary intra-alveolar epidermoid carcinoma of the jaw. J Path 97: 645-651 1969.
- 18) Aisenberg, M.S.: Malignant epithelial tumor of mandible in child aged 9. Am J Orthodont Oral Surg 28: 736-737 1942.
- 19) CAMPENIA, C.M., Boyle, P.E.: Embryonal carcinoma primary in mandible of a child with involvement of tooth pulp. Am J Orthodont Oral Surg 29 299-311 1943.
- 20) 田中広一：癌浸潤による骨反応に関する研究第1編—臨床的研究—癌浸潤下顎骨にみられる骨新生に関する研究一。日口外誌 25: 19-30 1979.